

「生まれ変わる武人」資料集

【資料1】片仮名本『因果物語』下巻十九

十九 産子ノ死タルニ、註ヲ作シテ、再来
ヲ知事

濃州池田ノ郷ニ。又右衛門ト云者アリ。其女房、面テ半分薄墨色也。

彼謂ヲ聞ニ。彼女房ノ親。子共ヲ多コロシケリ。或時、子死ケレバ。彼女房ノ母、子数多死ケリ、トテ、其子守鍋墨ヲ手ニ塗。死タル子ノ片面ニ塗付。頓テ生レ給へ、ト、云テ、捨ケリ。其子、頓テ生レ来テ。後迄ソダテケリ。

此女房、五十斗ノ比見タル人、語也

○江州佐和ノ足輕ニ。武蔵ヅ、ニテ。三人迄、子ヲコロシタル者有。余不思議ニ思。小刀ニテ、腕ヲ撞捨ケリ。然ルニ、四人メノ子。産ケルニ。憊ニ其疵有ケル、ト。去人、語リケリ「十五オ

【資料2】『柳庵雑筆』

○武蔵国多磨郡程窪村の民半四郎が子藤蔵、死して後、文化十二年乙亥十月十日に、同郡柚木領中野村谷津入と云処に住る、源蔵と云民の子に生れしを、勝五郎と名付て養育しが、勝五郎九歳と云文政六年に至り、我は程窪の某が子なりしが、爰へ再生りし由を云しにより、程窪へ尋行しに、違ふこと無しと、當時世に聞えたり。源蔵が父は村田吉太郎とて、尾張の国に仕しとかや。後に致仕して、源蔵は苗字小谷田と云民の子となりしなり。依て思に、曾我五郎時致の伊豆国田中荘の五郎大夫致時と再生りて、兄十郎祐成が感溺の冥苦を救ひし由、伊豆山の古籙に見へ、後また、常陸水戸六地藏寺恵範と三生し、武田大膳大夫晴信朝臣と四生し由甲斐の勇士の、旧記に、具に記せり。長谷小池坊専誉僧正と五生し、六波羅密寺恵範と六生して、何も亡兄の幽福を修せしと云も、聖徳太子の七生の事を記されしも、村上天皇の御時、天下を廻りて、法華経六十六部を納たりし頼朝房、貞元二年八月七日、信州水内郡茂菅村静松寺に終りしが、百七十年を経て、久安三年丁卯歳八月七日、左馬頭義朝の子に生れ、頼朝と名乗せ玉ひ、熱田宮に法華経を法衆せんとせし俊綱法師、宇治関白頼通公の子と生れ俊綱と云しは、十五歳にして尾張守に任じ、法師たりし時、つらかりし熱田大宮司を勘当し、箱根の大法師時政、六十六部の法華経を書写して、六十六箇国へ納たりし善根に依て、北条時政と生れたりなど云ことも、先輩の記載昭然たれば、概して偽とも云難にや。清の王士禛は、明の崇禎七年甲戌に生れ、「割註」日本寛永十一年甲戌なり。」永暦五年郷試に中し、八年会試に中し、後、官游三十余年、康熙辛未池

【資料3】大泉寺縁起（梗概） 堤邦彦『近世仏教説話の研究』96・翰林書房



図55 大泉寺「縁起略記」
(山梨県立図書館甲州文庫蔵)。

内の題は私に補う

(イ)〈信虎夢見山の故事〉

大永元年（一五二二）、福島正成軍の甲府
 侵攻を退けた武田信虎は夢見山に士卒を
 あつめ戦勝の宴を催す。祝酒にしばしま
 だろむうち、夢中に「今誕生の一人は曾
 我の五郎時宗が再来なりと、曾我の十郎
 祐成が富士野にて高僧に語」とみてめ
 ざめる。折から若君誕生の知らせがとど

き、このたびの戦勝にちなんで勝千代と名付ける。しかるにどうしたわけか月を経て若君の右手が開かない。

(ロ)〈十郎亡魂の予言と依頼〉

永正（一五〇四～二二）の秋、のちに大泉寺の開山となる天桂禪師は諸国行脚の旅途、富士のふもとでにわか
 日暮れ「あやしき柴の庵」の女に一宿を乞う。しばしあって「甲^{かとうらい} 冑を帯せる武者」が帰宅する。この侍こそ
 は十郎祐成の亡魂であり、第五郎が誦経侍仏の功德によって「ほどなく甲州の大守信虎の嫡子」に再生するこ
 とを予言し、未だ修羅の苦患をのがれずにいる「わが為に法華経一万部を誦誦」するよう信虎に言告げてはし
 ると述べ、その証拠に「金龍の目貫」を託す。もう片方の目貫は五郎（若君）の右手にあること、そしてまた
 甲城東の「おほいづみといふ池」の水で洗えば若君の手が開くことを教えると、庵も人も消え失せてもとの野
 原となった。

(ハ)〈天桂の入甲と大泉池の霊験〉

それより天桂禪師は甲州に赴き、「龍王の慈照寺」に止錫する。禪師の高徳を耳にした信虎の招きに応じて参
 殿し、十郎亡魂の告げを語るとともに、大泉池の霊水によって勝千代の掌中より目貫の片方を取り出す。（以
 下、富士川の源流「大泉池」の故事）

(ニ)〈大泉寺中興〉

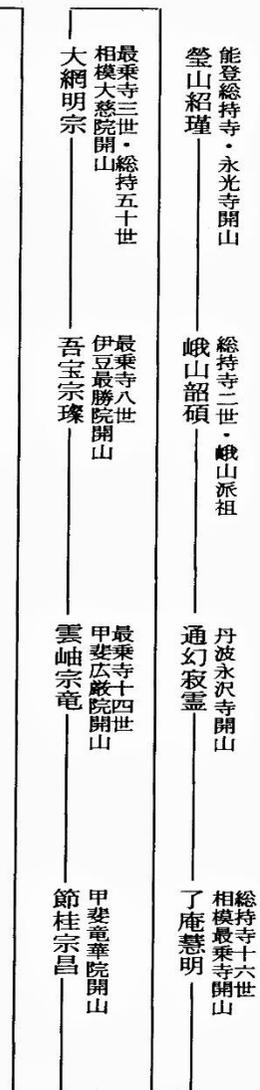
かくして霊験奇特に感じ入った信虎は、密宗大川寺を禅刹となして大泉寺とあらため、天桂を開山に請じてこ
 こを武田の祈願所・菩提寺と定めた。また、曾我兄弟のために法華経万部の仏事が営まれた。この時の初世天
 桂は新田義貞の末葉で加賀能美の人と伝える。のちに勝千代は信玄公となり、また信玄の伯父が当寺に入って
 二世吸江となったこともあり、同寺は武田家より格別の尊崇を得て天文年中に甲信の「僧録職」を仰せ付けら
 れた。

(ホ)〈法性の甲の由来と寺宝のかずかず〉

信玄治世のころ、境内より五色の光気たちのぼり不動の尊像が掘出された。これを作り籠めた「法性の甲」は
 いまも寺宝となって伝わる。その他、武田三代の御影、曾我二君の石塔・位牌³など多くの什宝が存する。

参考 天桂和尚関連資料

表I 瑩山・峨山系の法嗣



付表 天桂禅長・大泉寺関係略年譜

寛正二年・一四六一 天桂、加賀能美に生まれる（『大泉寺世代年譜』）
 永正十四年・一五一七 天桂、甲斐慈照寺真翁和尚の導普を聞き参謁（『日本洞上聯燈録』）
 *『世代年譜』は永正十五年のこととす
 大永元年・一五二一 天桂、武田信虎の命により甲府に大泉寺を中興して密宗を曹洞宗に改める（『縁起略記』）
 *慈照寺末
 九月二十九日天桂寂、六十三歳
 大泉寺、甲信地方の僧録職となる（『縁起略記』）
 徳川家康の命により「大泉寺開基並開山二代等の由緒御吟味」のうえ本領を安堵される（『甲州巡
 見通行記』）
 *同年三月武田氏滅亡
 羽柴秀勝入府、「由緒に付書出有之」（同）
 六世孝国『大泉寺縁起略記』を撰す
 江戸麻布今井町に大泉寺号の宿寺を立置（『甲斐国寺社由緒書』）
 十四世安州、『世代年譜』を撰し、初世天桂の項に五郎再生譚をしるす
 大泉寺、常恒会願出のため「天正中上意之趣並開基之由緒」を奉行所へ申上（『甲斐国寺社由緒書』）
 安州、江戸宿寺・大泉寺に入り「右之由緒等を以御講釈」（『甲斐国寺社由緒書』、『新著聞集』）
 同十八年・一五九〇
 同十九年・一五九一 慶長年間
 天和三年・一六八三
 元禄五年・一六九二
 元禄年中

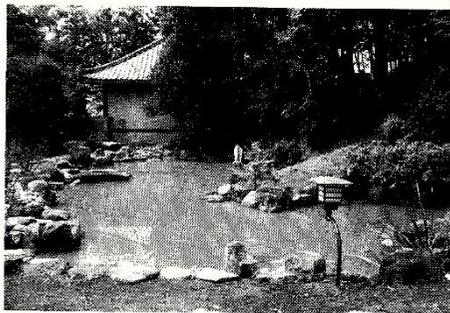


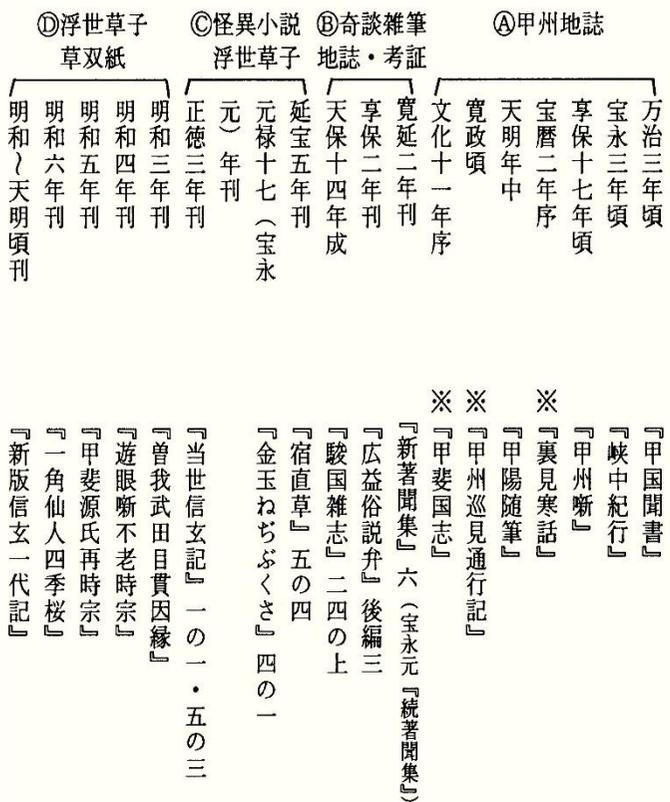
図57

同寺境内・大泉池。

【資料4】

曾我武田の再生譚を描く近世作品(地誌、隨筆、小説)

※印は『大泉寺縁起』(縁起略記)に拠るもの



【資料5】

『新著聞集』第六勝蹟篇「甲州祐成寺の由来」

ある旅僧、独一の境界にて、複子を肩にかけ、相州箱根山をこしけるに、日景、いまだ午の刻ならんとおぼしまに、俄に日くれ黒暗となり、目指もしらぬ程にて、一足もひかれざりしかば、あやしくおもひながら、是非なくて、とある木陰の石上に坐し、心をこらし仏名を唱ながら、峠の方をみやるに、究竟の丈夫、太刀をはき手づから馬のくつ草鞋をとり、松明ふり立て、一文字に馳くたる。跡につゞき若き女おくれじとまかれり。あやしく守り居るに。丈夫のいはく、法師は甲斐国にゆきたまふな。われ、信玄に伝言すべし。通じたまはれ。某は曾我祐成にてありし。これなるは妻の虎、信玄は我弟の時宗なり。かれは、若年より此山にあつて、仏経をよみ、仏名を唱るの功おぼろげにあらずして、今名将となり。あまたの人に崇敬せられ、又仏道にたよりて、いみじきあり様にておはせし。某は愛着の纏縛にひかされ、今に黄泉にたゞよひ、三途のちまた出やらで、ある時は修羅鬪諍の苦患いふばかりなり。願くば我為に、精舎一宇造営して、菩提の手向たまはれよと、いとけだかく聞えしかば、僧のいはく、安き御事に侍ひしかど、証拠なくては、承引いかゞあらんとありければ。是尤の事也とて、目貫片しをはづし、これを持参したまへと、いひもあへぬに、晴天に白日かゝり、人馬きへうせてけり。僧思ひきはめて、甲陽に越て、それ〱〱の便をえて、信玄へかくと申入れしかば、件の目貫見たまふて、不審き事かなとて、秘蔵の腰物をめされ見たまへば、片方の目貫にて有しかば、是奇特の事とて、僧に褒美たまはり、頓て一字をいとなみ、祐成寺と号たまへり。しかしより星霜良古て、破壊におよびしかば、元禄十一年に、其住持、しか〱〱の縁起いひ連ね、武江へ再興の願たてし事、松平摂津守殿きこしめされ、武田越前守殿へ、其事、いかゞやと尋たまひしかば、その目貫こそ、只今某が腰の物にもせしとて、みせたまふに、金の蟠竜にてありし。

【資料6】 『宿直草』巻五の四 「曾我の幽霊の事」

古めかしき咄に、修行者有て、国くまはる。宇都の山べのうつとも、夢としてもなく世をわたるに、あるとき其名も高き富士の麓よぎる。行衛も知らぬとながめし、聖の心に似りて見れば、そも又たがたく煙ぞや。降るか残るか解けぬかなきか、いさしら雪の雲に高く、いかづちも半腹になり、鳥もいかでか中央よりかけらん。比叡の山二十かさぬべき、我が秋津洲のみめのみかは、三国にたぐふべきもあらず。突兀としてまた時しらず、めがれずも唾を眺めて、まだ秋としもなきに、時も酉にかいくれ、我ころもでの墨染のころなり。

もとよりもさすらへの袖なれば、木かけ苦むしろなど尋ぬるに、あなたを見れば、灯影ほのめいて、四阿屋の軒さびしきあり。立寄りて見れば、いやしからずしつらひ、几に草紙ひきちらし、つねならぬ空焼の香おかしく美して、いと優なる女房の、衣裳めでたきばかりなるが、籠ちかく寄りゐ、松が枝松笠うちくべて、焼火にそふたるさま、又鄙には目なれずぞ有ける。やがて立寄り、仮寝のことを詫ぶるに、女房聞いて、「いたはしや旅行の袖の、なに行き暮たまふとや。人目かれたるあしひきの、山の住居のうき席も、一夜はあかし給へかし」とゆるす。うち嬉しくて内へ入るに、かの女房のたく釜を見れば、湧きかへりて湯玉たつを、いさゝめ盥に汲みて浴けり。をよそ人のわざとは見えす。かくて沐しまふに、外よりよろふたる者の帰入りぬ。その身朱になりて、疵多く蒙ふりたり。女房、「かへり給ふ」といふに、苦しげなるいらへせしは、軍のかへさかと思えたり。物具とりければ、いた手と見えしもつい癒けり。いとふしぎにぞ侍る。



僧を見て、「誰ぞ」といへば、妻「旅の人にて宿をめしたり」といふ、夫きいて、「さては行きくれ給ふかかゝる見苦しき所にお宿めし候事よ。はづかしくこそ侍れ」といふ。僧、「旅寝をゆるし給ふ事、嬉しくこそさふらへ。さるにても御身はいかなる人にてまします」といへば、「我は曾我の十郎祐成。あの者は大磯の虎といふをんな也。いまは昔に過し世を、語るにつけて浅ましけれど、さりにし建久のころ、此あたりにして、夜昼かたきを狙ひ、ついに祐経を討ち、年比の本意をとげつゝ、身はその時に空しくなれど、魂魄はまだ消えもせず、その罪、修羅にかんじ、執心いままさら残る世の、御僧にまで見みえまいらせさふらふぞや。草の枕のうたゝねも、縁あればこそ見もし見えもすれ。しかるべくはとふらひ給はれ。さりながらうれしくも、やがて修羅の巷を出で、来年の秋は小田原の城主に生れさふらふ。客僧縁あらば、それにて御目にかゝるべし。これを持ちて出給へ」と、太刀の目貫かたはづして、僧にあたふ。

僧、目貫を受けとりしに、此人もなくなり、日もまだ暮れず。ふしぎに思ひ、夢かとおもへど目貫はさらしに有けり。さて、そこ立ち退きとかく送るうち、はや明る年の秋になる。何となふ小田原に行く。ちまたの沙汰に、「殿には若君いできたまへども、左の手握り給ひてひらかず。父母なげき給ふ」といふ。僧、さては約束の人なりと知り、奥へ入して、「御手、ひらくるやうに致し申さん」といふ。やがて「召せ」とて僧まいり、かた／＼の目貫取り出だし、若君に見せければ、そのとき左の手をひらきたまふに、目貫有て僧の持てきたりしと一対なり。人々不審しけるに、富士のすそ野の約束をかたりしと也。

